陸前高田市文化財報告第９集

中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅰ

１９８５年３月

陸前高田市教育委員会

中沢浜貝塚発掘調査概報 I

発刊にあたり

文化庁指定史跡の広田町中沢浜貝塚区域の土地所有者臼井包治氏より、昭和58年4月12日、宅地の土留に積んである石垣が押し出され、崩壊のおそれがあり危険であるため、改めてブロック擁壁を積んで危険防止策を構じたい旨の申し出でがありました。又、昭和58年9月5日、同区域の土地所有者吉田三人氏より、宅地内に部落の生活道路があり大雨の際浸水し宅地や居宅に破損のおそれがあるので、土留壁を構築し危険防止を行いたい旨の申し出でがありました。検討を重ねた結果、指定の一部を現状変更もやむ得ないとの判断に立って承認申請書を文化庁に進達した。昭和58年7月5日付と同年11月21日付で、申請地は地下遺構の存在が予想されるので事前調査を行う旨の通知を受けた。昭和59年8月8日から岩手県教育委員会の指導のもと包蔵地の分布調査を主体として発掘調査を実施した。

このたびの調査により当地方の縄文時代の解明に貴重な資料が得られたと思います。

発掘調査にあたりご指導いただいた岩手県教育委員会文化財主査　菊地郁雄、遠藤勝博、相原康二、浅沼一彦先生、作業に協力下さった多くの方々、また人骨・犬骨の鑑定ならびに本書に原稿いただきました札幌医科大学百々幸雄先生、石田肇先生、国立歴史民俗博物館　西本豊弘先生には深く感謝の意を表するものであります。

この報告書を刊行するにあたり、土地所有者の臼井さん、吉田さんに何かとご配慮をいただき発掘調査が円滑に進行されたことを厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

陸前高田市教育委員会

教育長　吉田正人

例　　言

1、本書は、岩手県陸前高田市広田町字中沢に所在する中沢浜貝塚の発掘調査概報である。

2、調査はA区とB区の2か所を同時進行で行なった。A区がブロック擁壁設置に伴う市単独の事前調査、B区が保存管理計画策定のための国庫補助による分布調査である。

3、調査および整理にあたっては次の方々のご指導を賜わった。　（敬称略・順不同）

菊地郁雄、遠藤勝博、相原康二、浅沼一彦（以上岩手県教育委員会文化課）

高橋信雄、小田野哲憲、熊谷常正（以上岩手県立博物館）　岡村道雄（東北歴史資料館）

永嶋正春（国立歴史民俗博物館）　金野良一（大船渡市立博物館）

丹羽百合子（早稲田大学考古学研究室）

4、本遺跡出土遺物について次の方々から鑑定および執筆を賜わった。　（敬称略）

・人骨　百々幸雄・石田肇（札幌医科大学解剖学教室）

・犬骨　西本豊弘（国立歴史民俗博物館）

5、調査組織　　団長　吉田正人（陸前高田市教育委員会教育長）

総括　菅原昭雄（同　社会教育課課長）　事務局　佐々木徹朗（同　社会教育課課長補佐）

調査員　佐藤正彦・蒲生琢磨・吉田功（同　社会教育課職員）

6、文末に氏名を記した以外は佐藤が執筆編集した。

目　　次

序

例言　目次

Ⅰ、遺跡の位置と環境・周辺遺跡……1

Ⅱ、中沢浜貝塚の研究史……1

Ⅲ、調査に至る経緯……3

Ⅳ、調査の方法と経過……4

Ⅴ、基本層序……6

Ⅵ、人と犬の埋葬……9

1、甕葬された2体の新生児骨……12

2、中沢浜貝塚出土のイヌ……13

Ⅶ、中沢浜貝塚出土の骨角牙製品……15

Ⅷ、まとめ……16

挿　図　目　次

第1図　遺跡の分布及び周辺の遺跡……2

第2図　地形図及び発掘区……5

第3図　A区セクション図……7

第4図　B区基本層序……8

第5図　人骨及び犬骨出土地点……9

第6図　埋葬甕棺出土状況……10

第7図　犬骨出土状況……11

写　真　目　次

写真1　中沢浜貝塚航空写真……17

写真2　発掘風景及び貝層……18

写真3　埋葬甕棺出土状況……19

写真4　出土人骨……20

写真5　埋葬犬出土状況……21

写真6　遺物出土状況……22

写真7　出土骨角牙製品……23

写真8　出土骨角牙製品……24

Ⅰ、遺跡の位置と環境・周辺遺跡（第１図・写真１）

国指定史跡「中沢浜貝塚」は、岩手県陸前高田市広田町字中沢地区に所在し、陸前高田市の中心部より直線にして南東へ９㎞、国鉄大船渡線小友駅より南へ４㎞の地点に位置する。

周辺は、リアス式海岸特有の入り組んだ複雑な海岸線をなし、太平洋に大きく突き出た広田半島が、広田湾を形作る。遺跡は、広田湾を眼下に望む広田半島先端部付近の大森山（標高147.２ｍ）山麓に広がる西側緩斜面上に位置し、遺跡の南と北は沢によって開析される。遺跡の中心は、現海岸線より250ｍ程東の地点にあり、海抜５～20ｍ、面積約12,000㎡である。遺跡周辺の地目は、水田・畑地・宅地で、近年は宅地造成が著しい。

広田半島では、現在60か所の遺跡が知られている。そのほとんどは、大森山・仁田山（標高254ｍ）山麓の、海岸線までなだらかに突出する緩斜面上に分布する。貝塚は、既に消滅した貝塚を含めると13か所知られており、うち大陽台貝塚・獺沢貝塚は教育委員会によって発掘調査が行なわれており、それらの成果は報告書によって公表されている。（註）

註　及川洵・遠藤輝夫・遠藤勝博(1977年)「獺沢貝塚緊急発掘調査概報」陸前高田市教育委員会／及川洵・遠藤輝夫・遠藤勝博・金子浩昌・牛沢百合子(1979年)「大陽台貝塚発掘調査概報」陸前高田市教育委員会

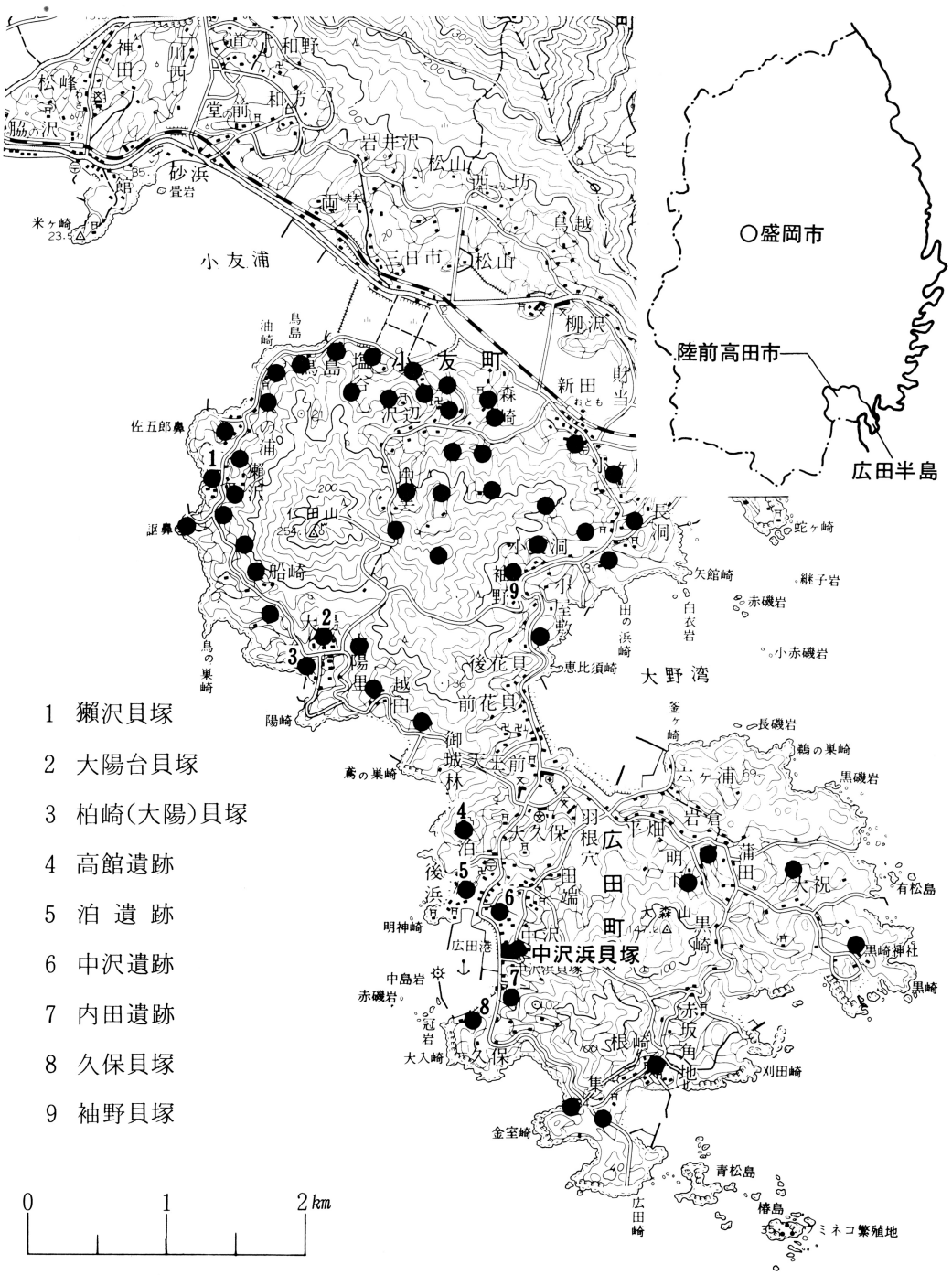
Ⅱ、中沢浜貝塚の研究史

広田町中沢浜にある中沢浜貝塚は、1907年（明治40年）野中完一の発掘調査において、17体の人骨が発見されて以来、周辺貝塚とともに大正から昭和初期にかけて精力的な調査研究が進められ、特にそれらの研究成果は、小金井良精・松本彦七郎・長谷部言人らの自然科学者によって学界に発表されている。（註１）

1918年（大正７年）同地及び他地域貝塚出土の人骨資料を研究した小金井は、抜歯の風習に関する論文を著わし、さらに、1927年（昭和２年）長谷部は、人類学的な立場から甕葬人骨例の比較研究を行ない「石器時代の甕葬が専ら死産児に対して行なわれた」ことに注目した。（註２）また、松本は、人骨に関しての出土層位・堆積状況及び帯丹風習などを検討し、時期についても、「宮古島上層式の下大半部に該当」するものとして位置づけている。（註３）

また、この間大山柏・八幡一郎・広瀬啓介らも来訪している。（註４）

一方、1924年（大正13年）当時内務省の考査官であった柴田常恵は、これまで気仙地方諸貝塚の発見や中央への遺物紹介などに努めていた小田島禄郎（明14～昭28）・鳥羽源蔵（明４～昭21）の協力を得、遺跡保存などの目的で発掘調査を行ない、その結果、昭和９年国の指定史蹟となっている。（註５）



第１図　広田半島における貝塚・遺跡の分布及び中沢浜貝塚周辺の遺跡

また、翌年小田島は、「岩手考古図集」(註6)を著わし、出土地点毎の土器形態・編年、装飾品などについて述べ、さらに、人骨・甕葬及び家犬などの埋葬状態について列記している。

その後、発掘調査は一切行なわれておらず、昭和30年代に入り、漁貝と骨角器との関係から漁撈文化を考察した東登(註7)(大14〜昭42)、遺物の分布と状態を紹介した及川千代松(註8)(明40〜昭46)の研究によって、表採資料が紹介されているにすぎない。

(蒲　生　琢　磨)

註1　松本彦七郎(1928年)「陸前国気仙郡の若干貝塚の時代相乃至式別」人類学雑誌第43巻第9号、鳥羽源蔵(1924年9月)「史前の日本を偲ぶ貝塚の遺物」岩手日報連載記事によれば、「人骨20余体を発見」とある。

註2　小金井良精「日本石器時代人に上犬歯を抜き去る風習ありしことに就て」人類学雑誌第33巻第2号

註3　長谷部言人「石器時代の死産児甕葬」人類学雑誌第42巻第8号

註4　(註1)と同じ

註5　小田島禄郎(1924年9月)「気仙の史蹟踏査」岩手日報連載

註6　同氏「岩手考古図集」岩手教育会江刺郡部会

註7　東登(1958)「気仙縄文式時代の骨角製漁撈器具考」陸前高田市教育委員会

註8　及川千代松(1962)「遺跡を尋ねて」大船渡市教育委員会

Ⅲ、調査に至る経緯

調査は、国指定史跡　中沢浜貝塚の分布調査並びに土留壁等の土木工事に伴う緊急発掘である。

分布調査については、昭和58年6月8日文化庁文化財保護部　服部技官並びに岩手県教育委員会文化課　大友皎主査の2人が来訪し、中沢浜貝塚の現況を視察された。

その後、岩手県教育委員会文化課と中沢浜貝塚の今後の対応について協議を行なった。今後、所有者に於て擁壁工事等が考えられるところから、貝層並びに竪穴住居跡等の分布調査を行ない、管理計画を策定するのが当面の課題である旨の指導があった。

当市教育委員会では、この管理計画を策定するため、昭和59年度を初年度として昭和63年度までの5カ年間は分布調査を行ない、昭和64年度から2カ年にわたり検討を行ない、管理計画を策定するものである。

この計画については、昭和59年1月10日、岩手県教育委員会文化課と協議を行ない、埋葬文化財分布調査事業として、国県の補助を受け発掘することに承認を得た。

昭和59年度の調査区は、中沢浜貝塚の南側に位置する所有者、広田町字中沢128の2、臼井包治氏の宅地約130㎡を調査することに決定した。

一方、土留壁土木工事に伴う発掘調査については、所有者、広田町字中沢55の1、吉田三人

氏より昭和58年9月5日づけをもって、現状変更許可申請書の提出があったので、文化庁へ進達していたところ、昭和58年11月21日づけをもって、申請地は地下遺構の存在が予想されるところで、事前に発掘調査を行う旨の通知があった。

調査に当っては、前述の分布調査事業と同時に行うことに決定し、A調査区、B調査区と2ケ所設定して、昭和59年8月8日から開始し、同年10月15日までの約2カ月間で終了した。

（佐々木　徹　朗）

Ⅳ、調査の方法と経過（第2図）

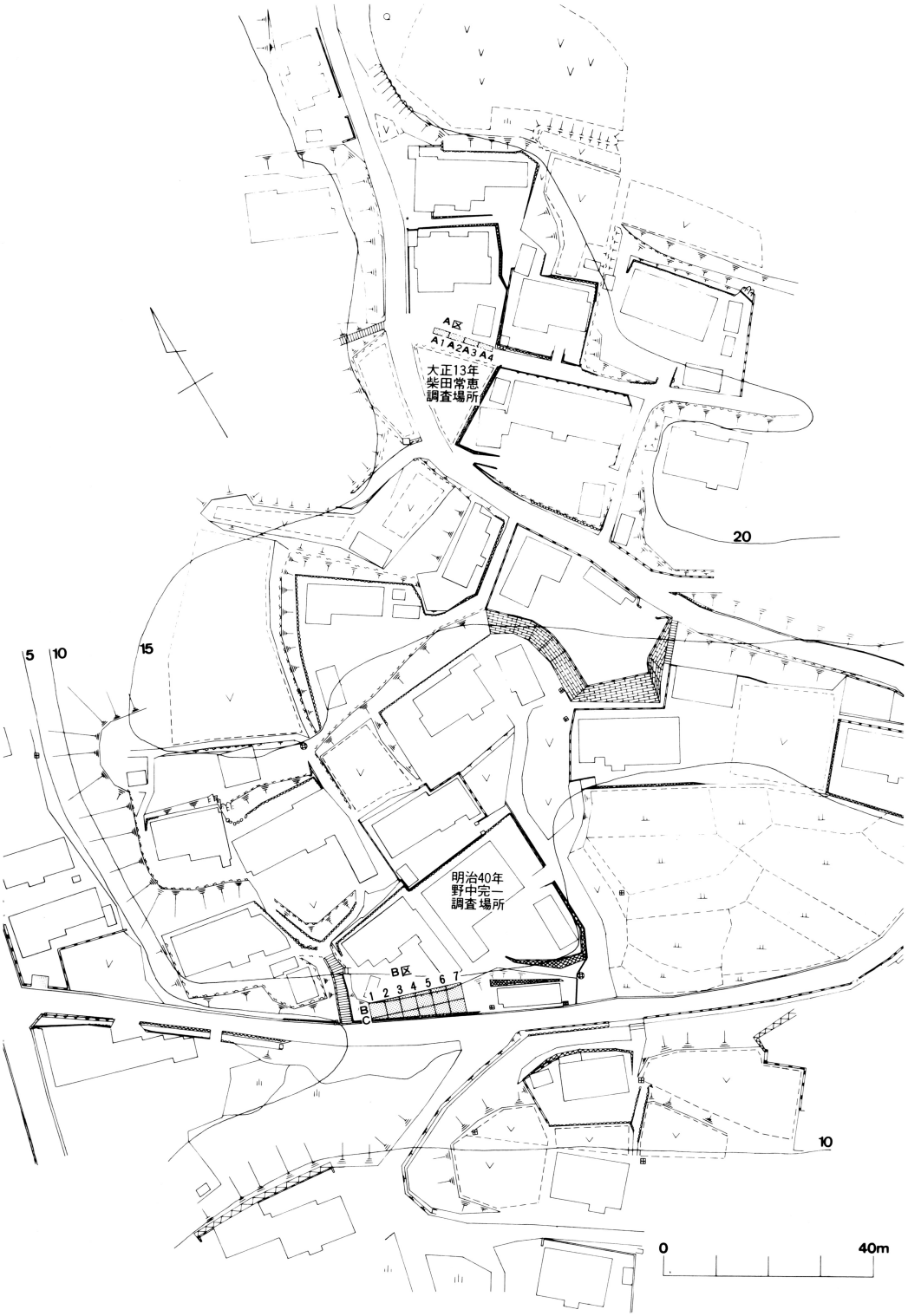
調査は、A区とB区の2か所を同時進行で行なった。A区が、擁壁工事に伴う市単独事業による事前調査、B区が、環境整備策定のための国庫補助金による貝層の範囲確認のための分布調査である。

※A区

該地は、中沢浜貝塚の位置する丘陵の中心からやや北東寄りの、北にむかって傾斜する丘陵部端に位置し、前面は小さな沢によって開析される。大正13年に、柴田常恵によって調査の行なわれた地点に隣接する場所である。周辺は宅地化が進み、調査地点においては宅地造成による削平のため、一部地山が露出しているような状況であった。また、造成後の耕作による撹乱のため、地表面に獣骨・魚骨・貝・土器片が散布し、貝層の存在が予想された。そのため、削平・撹乱状況及び貝層の拡がりを把握する目的で、5月23日にボーリング調査を行なった。その結果、A4グリッドは表土下が地山であること、A2・A3グリッドは大部分が撹乱を受けているものの、極い薄い混土貝層・純貝層が埋蔵することが判明した。A1グリッドに関しては、宅地造成の際の固く締まった盛り土のため地下の状況を把握するまでには至らなかった。

本調査は、8月8日より10月2日まで行なった。調査は、A1・A2グリッドに3m×1.5m、小屋・電柱等の障害物のためA3・A4には3m×1mのグリッドを設定し、15㎡をグリッド発掘で掘り下げた。その結果、A1グリッドにおいて、宅地造成以前の水道管埋設により一部撹乱を受けているものの、保存良好な貝層が埋蔵することが判明した。そのため、8月24日に、県教育委員会文化課と現地において協議を行ない、貝層の状況を把握するため地山まで掘り下げることを決定した。

調査に際しては、分層発掘を心掛け、細分された貝層・土層は149層に達する。また、各貝層の土はすべて持ち帰ることとし、持ち帰った土は土のう袋600袋以上に及ぶ。篩分析は来年度以降行う予定である。



第 2 図 地形図及び発掘区

※B区

該地は、丘陵部の南側斜面に位置し、明治40年に、野中完一によって発掘調査が行なわれ、人骨17体が出土した地点に隣接する場所である。

調査は、8月8日から10月6日までの約2ケ月間行なった。調査に際しては、幅5mで比高6mを測る急勾配の地点であったため非常な困難を伴った。発掘は、急勾配のため斜面にグリッド杭を設定することが不可能であったため、南北に1m幅のベルトを設けトレンチ発掘で行ない、実測に関してはトランシット・コンピューターを用い、仰角（V）・水平角（H）・斜距離から地点を割り出し、グリッド設定図に地点を落とすようにした。また、調査地点の土質が砂地であったため、階段状に掘り下げたものの絶えず土砂の崩壊を招き、9月28日には設定したベルト1本が完全崩壊した。そのため、10月2日に県教育委員会文化課と現地において協議を行ない、発掘を続行することは危険を伴うこと・宅地の崩壊を招く恐れがある等の事由により、中途で発掘を中止することを申し合わせた。従って、設定したベルトを完掘するには至っていない。また、地山面までは到達しえなかった。

V、基本層序

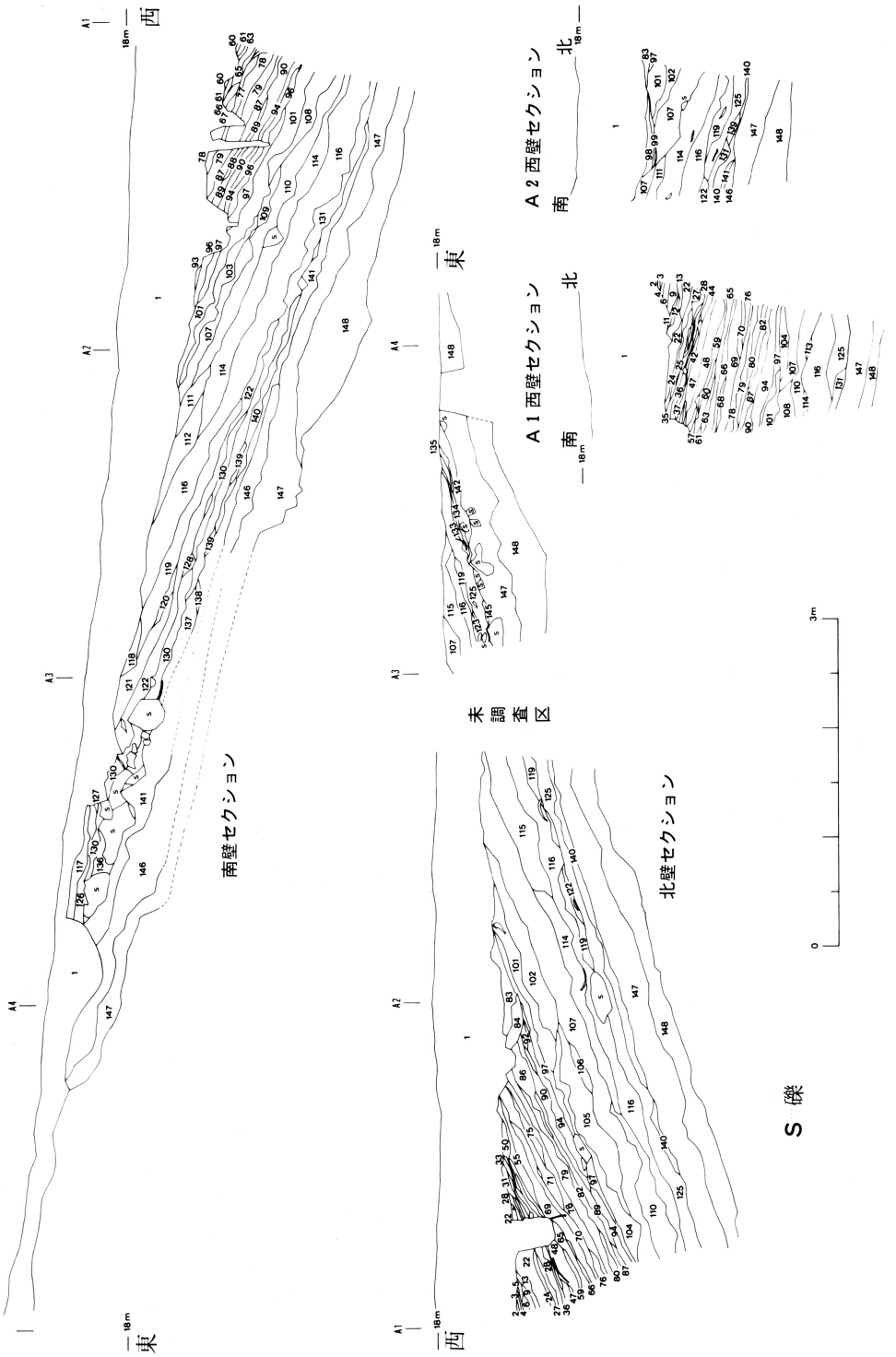
A区（第3図、写真2－1）

分層された層は149層に達する。層の堆積は、北方向にむけ20°～30°の勾配で傾斜しながら堆積し、北にゆくにしたがい層厚を増す。分層された層は、6層に概括しうる。

Ⅰ層　1層。表土及び宅地造成の際の盛り土、撹乱層を一括した。層厚は、A1グリット西壁では70cm程を測る。

Ⅱ層　2層～99層を概括した。灰層・混土貝層・混貝土層・純貝層等の互層である。A2グリッド北西壁付近から始まり、A1グリッドに拡がる。各層の堆積は均一ではなく、極く狭い範囲に堆積するもの、A1グリッド全面に拡がるもの等、いくつかのパターンがみられた。各貝層を構成する貝種は、イガイ・ムラサキインコなどの岩礁性二枚貝が主体であり、クボガイ・チヂミボラ・レイシガイなどの岩礁性巻貝の混在が多くみられた。また、アサリなどの砂泥性二枚貝を多く含む層も検出されており、貝の投棄の季節を知る上で重要である。遺物の出土は、各層とも非常に少なく、時期的には縄文時代中期末に位置づけられる。

Ⅲ層　100層～122層を概括した。破砕された貝・骨を少量含む混貝土層で、A－1・2・3グリッドにおいて検出された。骨は、マグロ類の骨が多く見られた。花崗岩の大型礫を多く含む。時期的には、縄文時代前期末から中期中葉にあたる。



第3図 A区セクション図

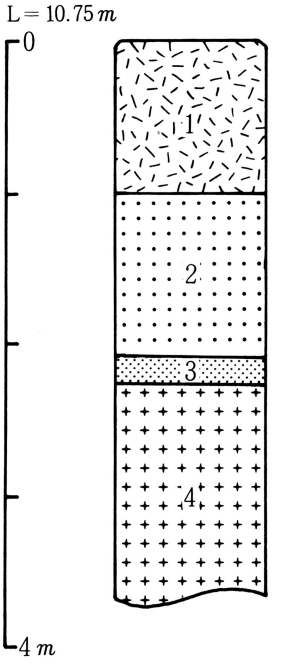
Ⅳ層　123層～145層を概括した。純貝層・混土貝層・混貝土層・魚骨層等の互層である。A－1・2・3グリッドにて検出した。貝層を構成する貝種は、イガイ・ムラサキインコなどの岩礁性二枚貝が多くみられ、クボガイ・タマキビ・レイシガイなどの岩礁性巻貝を多く含む。骨は、マグロ類の骨が多くみられた。貝・骨ともに風化が著しい。時期的には、縄文時代前期末の層である。

Ⅴ層　146層～148層を概括した。ほとんど遺物を含まない土層である。

Ⅵ層　149層。地山である。花崗岩の風化土である。

B区（第4図）

基本層序は、場所によって異なる部分もあるが、調査区の中央部に位置する平担部、B4グリッド北壁の観察により得たものを模式的に表わした。斜面部は、二次的な土の移動がみられ、層によっては、途中で消滅している。なお、土層の注記にあたっては、「新版標準土色帖」に従った。



第4図B区基本層序

第1層　宅地造成の際の盛土及び旧表土である。全区にわたって著しい撹乱を受けている。層厚100㎝。

第2層　灰黄褐色砂層　10YR2／6

粒径は、0.2㎜～0.02㎜の細砂である。厚さ、1㎝前後の層がラミナ状に堆積する。風による堆積と思われる。微小陸産巻貝を多量に含み、少量の魚骨を含んでいる。土器の出土はみられない。層厚105㎝。

第3層　黒褐色砂層　10YR3／2～2／2

縄文時代晩期の遺物を包含する層である。ツメタガイ、破砕貝、多量の魚獣骨土器片を含んでいる。出土した土器は、大洞C_2式期である。また、3層中において極く薄い黒色混貝土層を検出した。黒色混貝土層を境にして上下分層可能であるが、明瞭に区分できない。層厚18㎝。

第4層　にぶい黄褐色砂層　10YR5／3

粒径は第2層と同じ細砂で、1㎝前後の層がラミナ状に堆積する。微小陸産巻貝を含み、土器細片を若干、破砕貝、魚骨を少量含む層である。下限は確認されていないため、層厚は不明である。

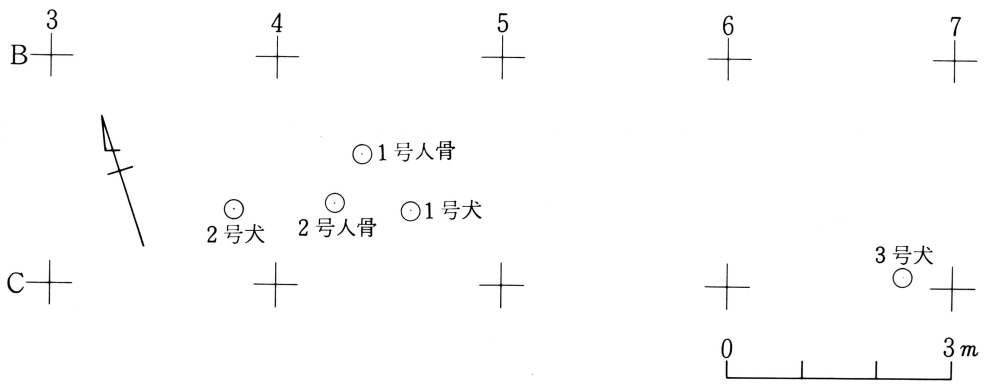
Ⅵ、人と犬の埋葬（第５・６・７図、写真３・５）

Ｂ－３・４・６グリッドにおいて甕棺２個・埋葬犬３体を得た。いずれも第４層にぶい黄褐色砂層よりの出土で、掘り方は検出できなかった。また、砂地であるため、検出時点において土砂の崩壊を招き、１号犬は実測できなかった。

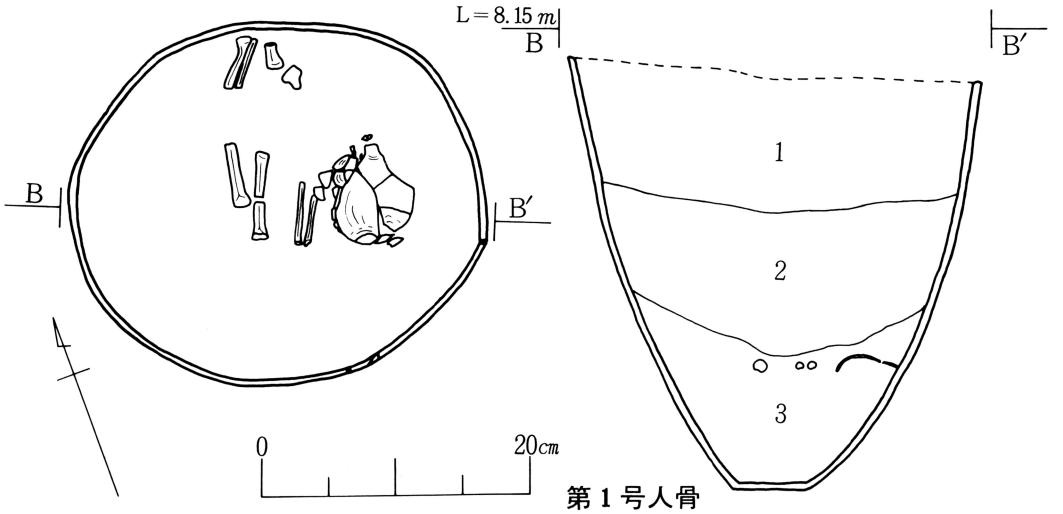
該地は、明治40年に、野中完一によって発掘調査が行なわれ、人骨17体が出土した地点に隣接する場所である。野中完一の調査の際の層位は、黄褐色砂層（２層に該当か？）・黝黒色砂層（３層に該当か？）・貝層の順に層の堆積がみられ、人骨は黝黒色砂層下部よりの出土とされている。現段階では、今回出土した人骨・犬骨との時期的な関係については不明であるが、丘陵部南側斜面に墓域が形成されていたことが判明し、中沢浜貝塚の性格を把握するうえで貴重な資料を提示したといえる。(註) 今後、昭和63年度まで分布調査を継続して行う予定であるので、いずれ機会を改め再調査を行ないたい。

なお、出土した人骨・犬骨については、札幌医科大学解剖学教室　百々幸雄氏・石田肇氏、国立歴史民俗博物館　西本豊弘氏に鑑定および執筆をお願いした。記して感謝する次第である。

註　松本彦七郎（1928年）「陸前国気仙郡の若干介塚の時代相乃至式別」人類学雑誌第43巻第９号

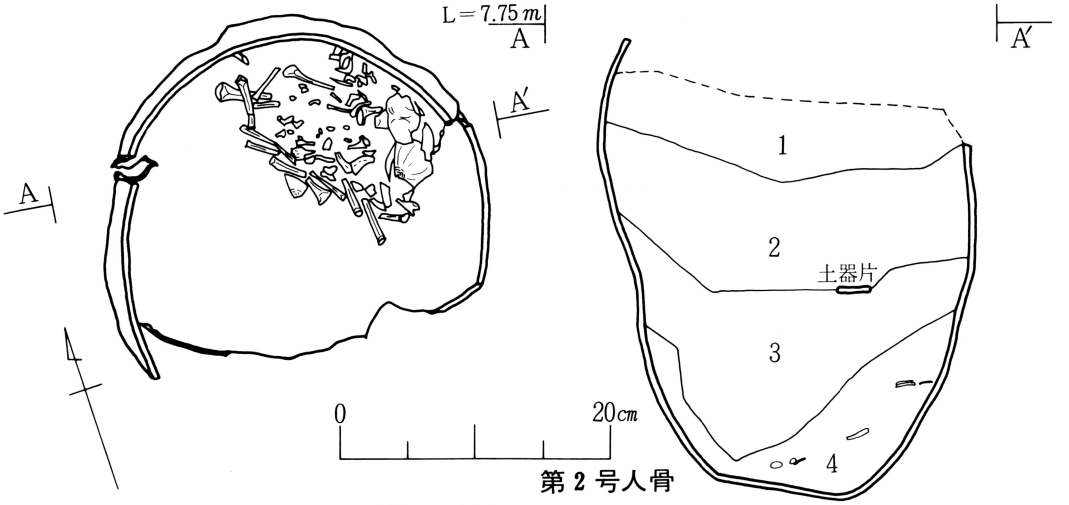


第５図人骨及び埋葬犬出土地点



第１号人骨

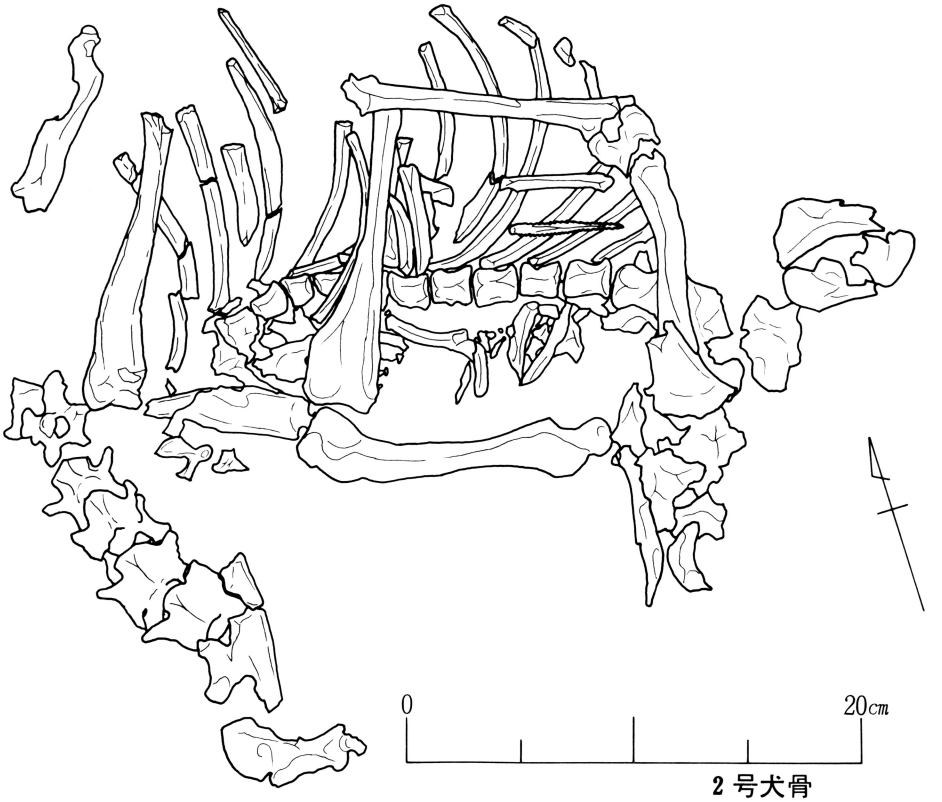
第１層　10ＹＲ５／３　にぶい褐色砂層
　　極小の貝片を多量に含み炭化物を若干含む
第２層　10ＹＲ３／２　黒褐色砂層
　　極小の貝片を多量に含み炭化物はなし　人骨を含む
第３層　10ＹＲ４／２　灰黄褐色砂層
　　人骨を含む



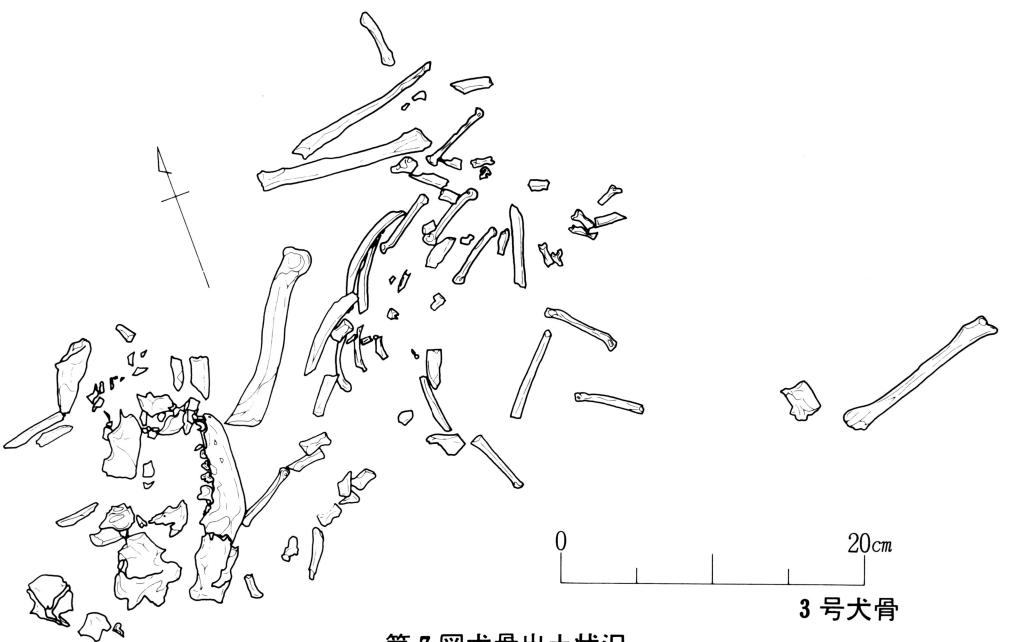
第２号人骨

第１層　10ＹＲ５／３　にぶい黄褐色砂層
　　極小の貝片を多量に含み炭化物を若干含む　貝片(直径10ミリほど)２～３点を含む
第２層　10ＹＲ５／２　灰黄褐色砂層
　　極小の貝片を多量に含み炭化物を若干含む　土器細片１点を含む
第３層　10ＹＲ４／３　にぶい黄褐色砂層
　　極小の貝片を多量に含み炭化物を微量に含む　腐植痕あり
第４層　10ＹＲ２／３　黒褐色砂層
　　極小の貝片を多量に含み炭化物を微量に含む　人骨を含む

第６図埋葬甕棺出土状況



2 号犬骨



3 号犬骨

第 7 図犬骨出土状況

1、岩手県中沢浜貝塚に甕葬された2体の新生児骨

百々幸雄・石　田　肇

昭和59年度の発掘において縄文晩期中葉の甕棺より2体の新生児骨が検出された。

第1号人骨（写真4－1）

保存状態：頭骨片、椎骨および肋骨の破片、左肩甲骨、左鎖骨、左右寛骨が同定される。四肢長骨では、左上腕骨、左橈骨および尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右不明の腓骨が同定される。また、乳歯の歯冠片が数点保存される。

四肢長骨化骨長		推定頭殿長*
左上腕骨	63.2㎜	329.3㎜
左 尺 骨	61.4㎜	338.6㎜
左 橈 骨	52.6㎜	328.0㎜
左大腿骨	75.6㎜	342.4㎜
右 脛 骨	64.4㎜	
左 脛 骨	64.8㎜	332.6㎜
腓　　骨	63.2㎜	342.3㎜

左長骨長より推定された頭殿長を平均すると335.6㎜となり、これは森田・他（1973）によれば約40週の胎児に相当する。おそらく周産期死亡児を埋葬したものと思われる。

人骨の形質に特記すべきことはない。

第2号人骨（写真4－2）

保存状態：頭骨片、椎骨および肋骨の破片、左肩甲骨および鎖骨の破片、左右の寛骨が同定される。四肢長骨では、左右上腕骨、左右橈骨および尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨が保存される。

四肢長骨化骨長		推定頭殿長*
右上腕骨	57.8㎜	
左上腕骨	59.4㎜	310.9㎜
右 尺 骨	52.9㎜	
左 尺 骨	54.6㎜	304.2㎜
左 橈 骨	48.9㎜	306.3㎜
右大腿骨	65.4㎜	
左大腿骨	67.5㎜	310.4㎜
右 脛 骨	59.0㎜	

左 脛 骨	58.2 ㎜	303.4 ㎜
右 腓 骨	54.4 ㎜	
左 腓 骨	55.0 ㎜	303.7 ㎜

左長骨長より推定される頭殿長を平均すると306.5㎜となり、森田・他によれば、約37週の胎齢に相当する。この例もおそらく週産期死亡児を埋葬したものであろう。

人骨の形質で興味あることは、後頭骨底部の外縁より、左右とも約3㎜の切痕がみられることである（写真4－2矢印)。この切痕は、島（1941）によれば、Incisura basi－prebasiocci－pitalis とよばれるもので非常に出現頻度の稀な形態異常であり、現代日本人で約1％の出現率であることが知られている。東日本の縄文時代人では、岩手県細浦貝塚より出土した縄文中期ないし後期に属する成人頭骨、北海道虻田町入江貝塚より出土した縄文中期の若年頭骨および北海道南茅部町の臼尻B遺跡出土の縄文中期成人頭骨にも認められている（Kanda, 1964; 百々・山口，1980）。しかしその形態学的意義については未だ不明な点が多い。

＊森田・他（1973）の推定法による。

文　献

百々幸雄・山口　敏（1980）臼尻B遺跡第10号住居跡より発見された人骨について．臼尻B遺跡　南茅部町教育委員会

Kanda, S.（1964）On the excavated skulls from the Hosoura shellmound in Iwate Prefecture. Med. J. Osaka Univ. 115.

森田　茂・服部恒明・河野　徹（1973）　日本人胎児の長骨長による頭殿長の推定。慈医師　88.

（札幌医科大学解剖学教室）

2、中沢浜貝塚出土のイヌ

西　本　豊　弘

1984年度の中沢浜貝塚の調査ではイヌの埋葬が3例発見された。そこで、ここでは埋葬例を含めたイヌの出土例についてその内容を簡単に紹介しておきたい。

1 号 犬 骨　B－4区より一括して出土したもので、頭蓋骨片、左上顎骨片、右上顎骨片，第1・2頸椎を含む椎骨が採集されている。頭蓋は破損が著しいが、前頭部から後頭部にかけての破片である。左上裂肉歯の歯冠部最大長は17.5㎜であり、比較的大きい。

2 号 犬 骨　B－3区より一括して出土した例で，ほぼ全身の部位がみられるが、下肢の骨が多い。頭蓋の骨は破損が著しいが、後頭部の矢状稜は弱く、雌の可能性がある。ただし、脛骨は太くたくましい。なお、この犬骨には幼獣の大腿骨（第6号犬骨）が混っていた。

3 号 犬 骨　B－6区より出土したもので、頭蓋と上肢の骨や椎骨がみられた。頭蓋は破損

が著しいが、後頭部の矢状稜は高く、また上、下の裂肉歯も大きいことから、おそらく雄と思われる。ただし、陰茎骨は採集されていない。

4 号 犬 骨　A－1区より出土した右上顎骨片と左右下顎骨を一頭分と認定したもので、おそらく埋葬されていたものであろう。上、下裂肉歯は小さく、雌の可能性が強い。

5 号 犬 骨　C－3区より出土した右上顎犬歯である。歯根孔は閉じておらず、生後数ケ月程度の若獣である。

6 号 犬 骨　2号犬骨に混入していた幼獣の大腿骨と椎骨、足根骨で、おそらく生後1ケ月程度の幼犬であろう。

7 号 犬 骨　B－4区より出土した右下顎骨と右上犬歯の2点である。下顎裂肉歯長は19.6㎜で小型犬としては比較的大きい。この犬骨は1号犬骨と同一個体の可能性があるが、断定できないので一応別個体とした。

以上、中沢浜貝塚出土の縄文時代晩期の家犬を簡単に記した。これらの犬骨のうち、一括して出土し埋葬されたと思われるものは、1、2、3、6号犬である。その他の4、5、7号犬は散乱状態で出土したものであるが、4号犬は左右の下顎骨と右上顎骨が伴っており埋葬されたものが何らかの原因で撹乱された可能性が強い。犬の大きさについては、頭蓋の完存品がなく、また四肢骨の完存品が少ないために明確には言えないが、残存している部位の大きさからみて、これらの犬はいずれも小型犬で、現在の柴犬程度の大きさと推測される。

中沢浜貝塚出土のイヌ一覧表

No.	出土地区	年齢	性別	主要出土部位	主要計測値（㎜）
1	B－4	成獣	－	上顎骨、椎骨	L.P^4長 17.5
2	B－3	〃	♀？	頭蓋骨、下肢の骨	R. Fe 長 158.0　R. Tib 長 157.0
3	B－6	〃	♂？	頭蓋骨、上肢の骨	L. P 長 17.7　L. Rad 長 140.4 R.M_1長 19.3　L. Ul 長 163.7
4	A－1	〃	♀？	上、下顎骨	R. P^4長 14.6　L. M 長 17.2
5	C－3	若獣	－	上右犬歯1点のみ	
6	B－3	幼獣	－	左大腿骨	L. Fe 長 58.2
7	B－4	成獣	－	右上顎骨	R. M_1長 19.6

註　L：左　R：右　P^4：上顎第4前臼歯（裂肉歯）　Tib：脛骨
M_1：下顎第1後臼歯（裂肉歯）　Rad：焼骨　Ul：尺骨　Fe：大腿骨

Ⅶ、中沢浜貝塚出土の骨角牙製品

装 身 具　（写真７－１～７、写真８－６～８）

写真７－１（Ｂ区第３層出土）は、ワシタカ科の末節骨に穿孔が１つ施されており、一部は欠損している。同２（Ａ区出土）の材質は、中型陸獣の犬歯と考えられる。穿孔は１つ。完形品である。同３（Ａ区第63層出土）については、半截された鹿角片に５つの穿孔が施された事は判るが、全体に腐蝕が著しいために詳細を知る事はできない。同４（Ａ区第85層出土）は、四角形に整えられたカメの甲羅に穿孔が２つ施された装身具である。一部は欠損している。同５（Ａ区第89層出土）には２つの穿孔が施されている。一部は欠損する。同６（Ａ区出土）の縁には形を整えるための調整がなされている。一部は欠損する。部分的にタールの付着が認められ、穿孔は４つ施されている。同７（Ａ区出土）は、イタチザメと思われるサメの歯の歯根部両端に穿孔が１つずつ施された装身具の完形品である。

写真８－６（Ａ区94層出土）は、海獣骨製で、欠損している。穿孔は３つ。装飾的な刻線が施されている。同７（Ａ区第112層出土）は、イノシシの下顎犬歯を利用した装身具で、全体に擦痕が認められる。一部は欠損し、穿孔は１つである。同８（Ａ区第75層出土）は、イヌ科の動物の脛骨を使った管状の装身具と考えられる。両端には摩り切った跡があり、全体には擦痕痕が認められる。焼けて黒く変色している。

釣　　針　（写真７－８、Ｂ区第４層出土）

最終的な調整を残すのみの未製品である。材質は鹿角と思われるが、薄手な事もあってか、かなり脆くなっている。外鐵が２つ作り出されている。

ヤ　　ス　（写真７－９～12）

写真７－11（Ｂ区第３層上面出土）は、鹿角製であるが、焼けて黒く変色したと思われる。器軸方向の擦痕が全体に認められるが、くびれ部においては、器軸方向と直交する擦痕が器体を巡っている。同９（Ｂ区出土）、同10（Ｂ区第３層出土）は、器軸をはさんで浅い削り込みが施され、先端部付近が欠損する。ただし、後者の基部にはタールが付着している。同12（Ｂ区第３層出土）は、先端部付近が欠損し、器体の中程にはタールの付着が認められる。鹿角製である。

骨　　針　（写真８－１、２）

写真８－１（Ｂ区第４層出土）は、完形品である。全体に丁寧に仕上げられている。同２（Ａ区出土）は、器軸に対して斜位方向の擦痕が全体に認められる。一部は欠損している。

角　　箆　（写真８－３、Ａ区第79層出土）

鹿角製の完形品である。全体に擦痕が認められるが、角皮の凹凸は残っている。

骨　　箆　（写真８－４、Ｂ区第４層出土）

シカの中足骨近位部を使用している。完形品である。先端部には擦痕、側面には剥離痕が認められる。

斧状骨器　（写真８－５、Ａ区第112層出土）

鯨骨製。刃部に相当する部分が作り出されている。完形品である。

異形角器　（写真８－９、Ａ区第112層出土）

鹿角枝の叉状部が利用されており、角皮は削られ、器体は丁寧に仕上げられている。全体として鉤状を呈する。鉤先相当部の先端は、いくぶん太めに作り出される。根バサミ状の構造となっている軸頭相当部には、ポイント状の石器がはさみ込まれ、アスファルトによって固定されている。ほぼ完形品である。ただし、装着された石器は欠損している。　　（吉田　功）

Ⅷ、ま　と　め

1、中沢浜貝塚は、広田半島先端の大森山山麓に広がる西側緩斜面上に位置し、海抜５～20ｍ，面積12,000㎡である。

2、調査は、Ａ区とＢ区の２か所を同時進行で行なった。Ａ区が擁壁設置に伴う事前調査、Ｂ区が環境整備策定のための分布調査である。

3、Ａ区において、縄文時代前期末・中期末の保存良好な貝層を検出した。層は、北方向にむけ急勾配に傾斜しながら堆積する。分層された貝層・土層は149層に達し、各貝層の土はすべて持ち帰った。持ち帰った土は、土のう袋600袋以上に達し、60年度以降分析を行う予定である。

4、貝層を構成する貝種は、岩礁性二枚貝が主体であった。

5、Ｂ区において、甕棺２個・埋葬犬３体を得、丘陵の南側斜面が縄文時代晩期の墓域であることが判明した。

6、Ｂ区３層中において極く薄い混貝土層を検出したが、未発掘区に拡がっているため、充分に性格を把握できなかった。

7、出土した遺物は、骨角器がＡ区・Ｂ区合わせて30点程で、土器は大型コンテナ５箱程である。時期的には、Ａ区が縄文前期末から中期末，Ｂ区が縄文晩期中葉である。

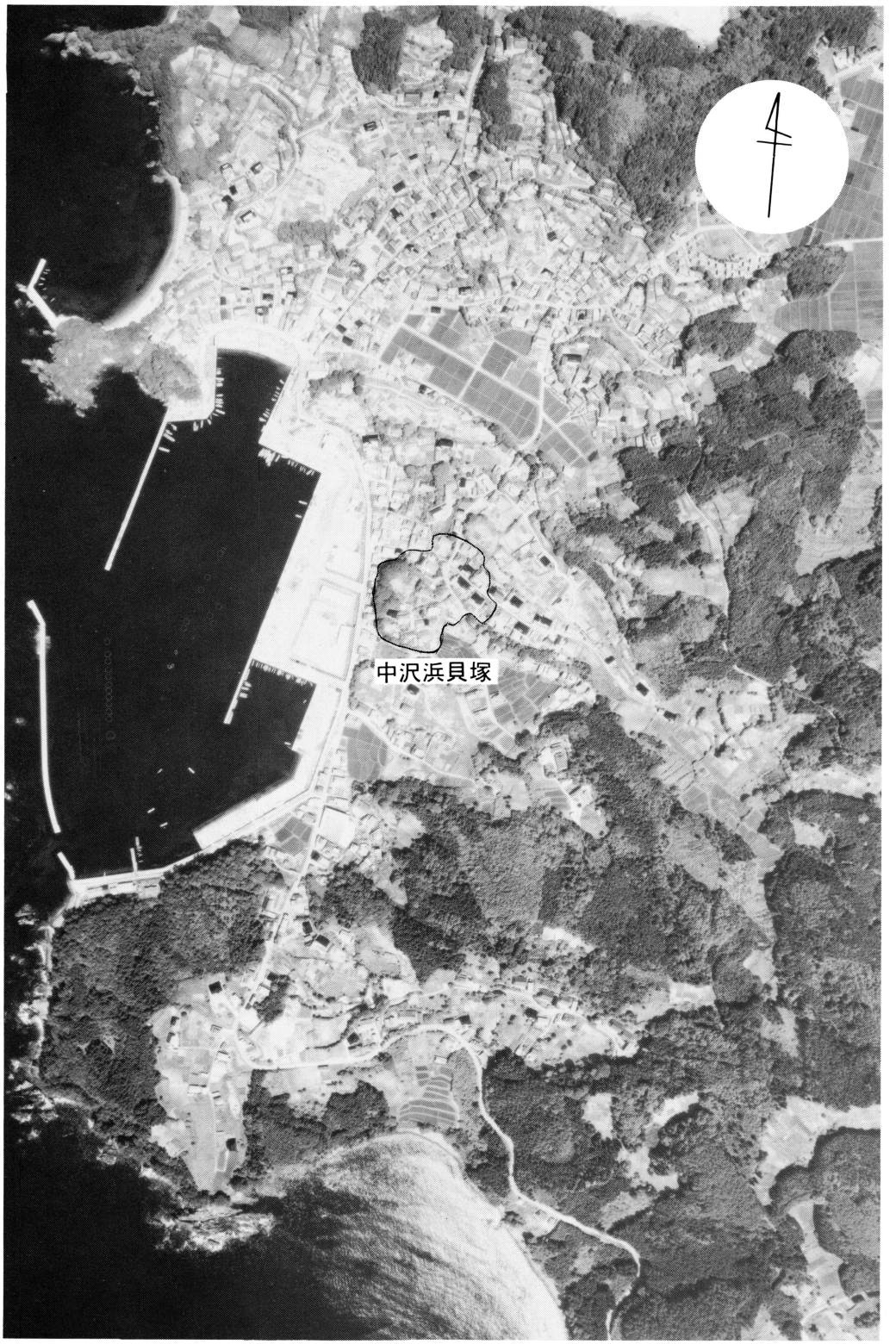


写真１　中沢浜貝塚航空写真

2　A区発掘作業風景

1　A区西壁断面の貝層堆積状況

3　B 区 発 掘 区

写真２　発掘風景及び貝層

1　第 1 号 人 骨

2　第 2 号 人 骨

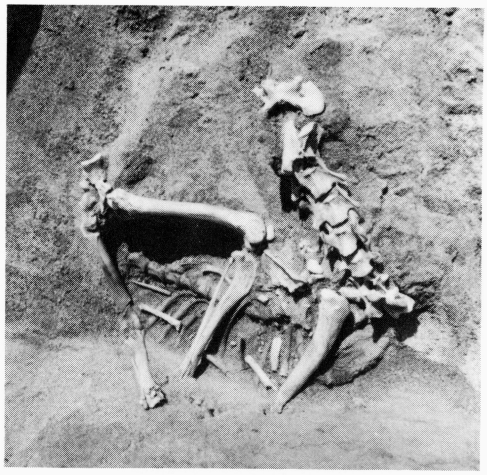
写真 3　埋葬甕棺出土状況

1　第 1 号 人 骨

2　第 2 号 人 骨

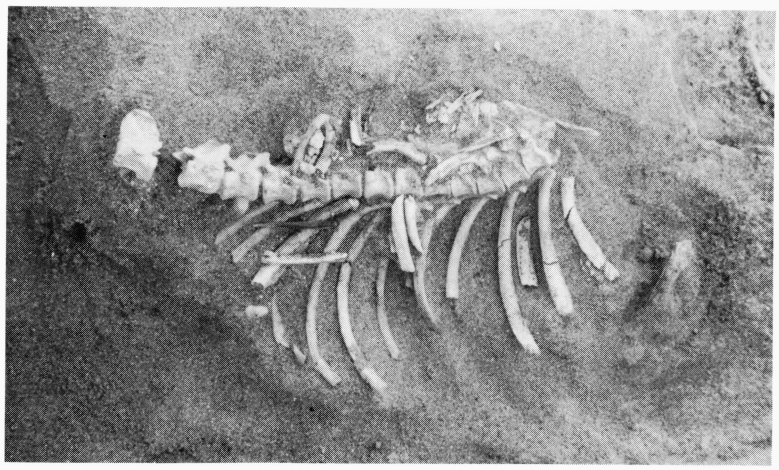
写真 4　出 土 人 骨

1 1 号 犬 骨



2 2 号 犬 骨

3 2 号 犬 骨



4 3 号 犬 骨

写真 5　埋葬犬出土状況

1 遺物出土状況

2 遺物出土状況

3 イノシシの下顎
出土状況

写真 6　遺物出土状況

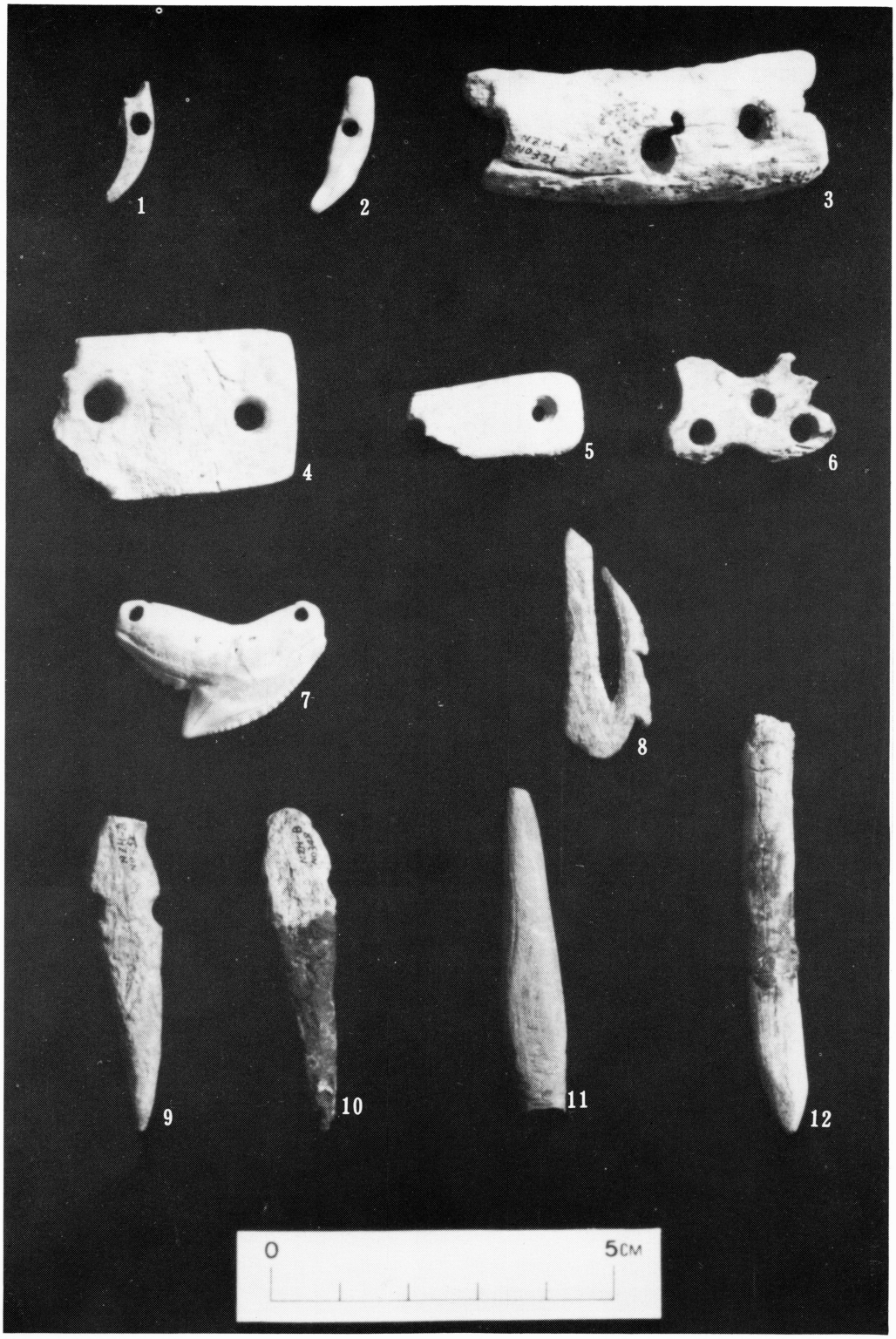


写真７　出土骨角牙製品

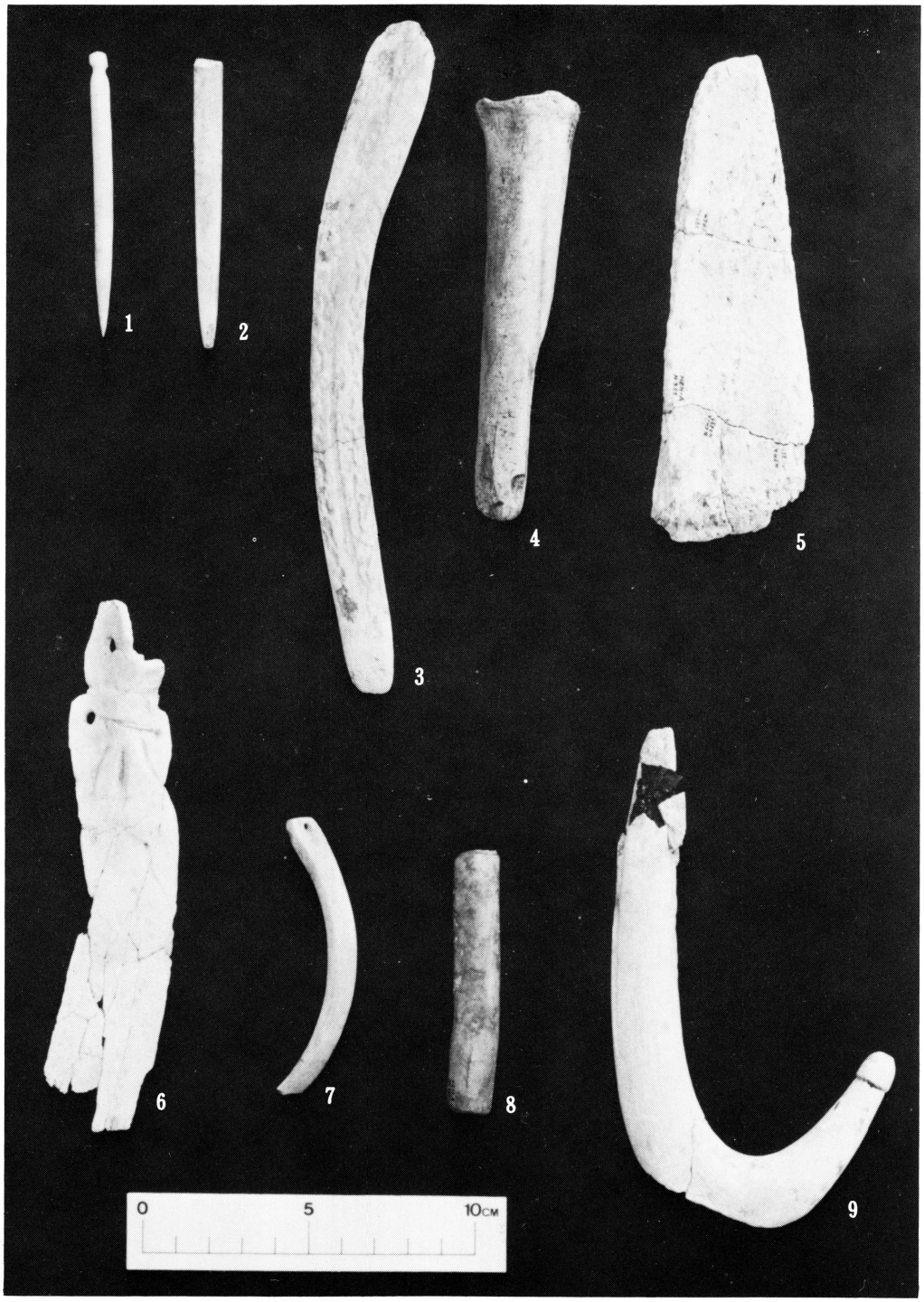


写真８　出土骨角牙製品

岩手県陸前高田市

中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅰ

（陸前高田市埋蔵文化財報告書第９集）

発　行　日　1985年３月

編集・発行　陸前高田市教育委員会
岩手県陸前高田市高田町字館の沖110
TEL　（０１９２）５４－２１１１

印　　刷　高　田　活　版　所
岩手県陸前高田市高田町字大町５
TEL　（０１９２）５５－２６９４